

全学共通科目の2つの授業をピックアップし、授業の工夫や改善点等をレポートします。

※掲載している情報(授業科目・担当者名等)は2020年度の情報です。



未修言語科目群
フランス語Ⅰ

対面でないからこそ、
学生の興味を引き出し
より授業に前向きに。

大須賀 沙織 准教授
(人文社会学部 人文学科 フランス語圏文化論教室)

履修する学生が皆熱心で、試験の成績も良い大須賀先生のクラス。2020年度は年間を通じてオンライン授業となりましたが、そうした中でも学生の姿勢に変化はなかったのかを語ってもらいました。

「フランス語Ⅰ」はどのような授業で、
どのようなことを目標にしていますか？

未修言語科目とは一般に第二外国語と呼ばれている科目群で、この授業は1年生が対象です。フランスの文化に興味や憧れを持って選択する学生が多いので、パリや各地の観光名所、食文化などを題材にした教科書やフランス関連の動画を用いながら、楽しくフランス語を学べるようにしています。学生たちも楽しみながら能動的に学習してくれて、試験の点数も非常によくて驚きます。最終的にはフランス語で初歩的な会話ができるレベルを目指し、フランス語圏文化への視野を広げてもらうことが目標です。初めてフランス語を学ぶという学生がほとんどですが、フランス語Ⅰの授業でフランス語とフランス文化の面白さを知り、2年次からフランス語圏文化論教室に入ってくる学生も毎年数名います。

授業ではどのようなことに取り組み、
どのような改善を行っていますか？

未修言語科目は週2回(人文社会学部では週3回)開講しています。1年次にはこの他にも必修の英語や基礎ゼミナールなどがあるので、学生の負担を考えてなるべく授業内で消化できるよう心がけています。そして、動詞活用等の小テストを毎回行い、学生の理解度を確認しています。本年度は1年をとってオンラインでの授業となり、対面で発音練習や会話練習ができないもどかしさがありました。Zoomでは一斉に発音するとタイムラグが生じてしまいます。発音練習では私の発音を聞いてから、学生には全員ミュートの状態で各自発音してもらいました。会話練習ではブレイクアウトルームを使い、学生同士でペアになり練習してもらいました。また、教室でやるように、画面上のホワイトボードを共有して解説したり、練習問題の答え合わせをしたりもでき、Zoomでも思いのほか対面に近い形で授業ができることを学びました。一方、対面授業でない分、例年よりも授業の速度を落として丁寧に指導することも意識しました。中間試験と期末試験もオンラインで行うことになり、若干の不安もありましたが、Zoom、kibaco、メールをうまく活用することでスムーズに行うことができ、学生の成績も例年と変わらないレベルを維持できたと思います。



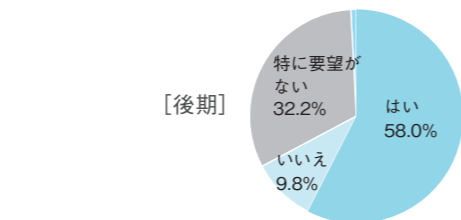
この授業で今後取り上げたいこと、また授業を履修する学生に
伝えたいメッセージはありますか？

2021年度は対面授業に戻る見込みなので、対面で発音練習や会話練習ができるよるこびやありがたさを再確認しながら、授業をしていきたいと思っています。未修言語科目(ドイツ語、フランス語、中国語、韓国語)は入学したばかりの1年生が新しい言語を学び、新たな言語体系の規則や初めての音の感覚を味わいながら楽しく発音練習をし、会話練習の中でクラスメートと触れ合う貴重な場でもあります。フランス語を学ぶと、私たちの生活や身の回りには想像以上にフランス語が使われていたり、フランス文化が息づいていることを実感できるはず。ぜひ楽しみながら学んでいってください。

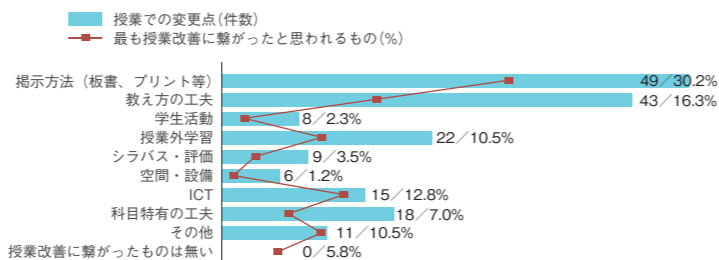
教員アンケート結果

実施期間 後期2021年1月12日～2月5日
授業改善アンケートと同時に実施した教員アンケートの結果を公表します。

Q1 このアンケートにかかわらず、
学生の要望を参考にして今回の授業で変更した点がありますか。



Q2 授業での変更点について、以下のカテゴリの中から
当てはまるもの全てを選択してください。



Q3 学生の要望は理解しているが、今回の授業には反映しなかった要望について、
以下のカテゴリから当てはまるものを全て選択してください。



学生と教職員がコロナ禍における授業や学生支援について語り合う FD・SDセミナー座談会レポート

本学の教員と職員とが一堂に会し、高等教育の動向や本学の課題等について共に考える「FD・SDセミナー」を毎年開催していることをご存知でしょうか？これまでのFD・SDセミナーは、主に外部講師による講演や教職員の取組事例の紹介を中心として実施していましたが、昨今の状況に鑑み、2020年度はコロナ禍における学生支援や授業における課題を教職員で共有するとともに、学生と教職員とが本音で語り合う「座談会」を初めて実施しました。座談会には、所属や学年の異なる7名の学生代表が参加し、「都立大学はリアルタイムによるオンライン形式の授業が多く、生活リズムも崩れることなく良かった。」「オンライン形式でも、学生がなるべく授業を受けやすいように工夫や配慮されている。」といったオンライン授業の良かった点が意見として挙がりました。一方、「実験・実習の授業が行われず、理解が不十分のまま進んでいってしまった」「オンラインでのグループディスカッションは難しい」「教員がオンライン会議システムの使い方に不慣れな部分があり、授業が円滑に進まなかったことがあった」といった困ったこと、改善してほしいことなどの意見も寄せられました。授業の他にもサークルなどの課外活動に関する要望が挙がり、これらの意見について教職員から質問や回答があるなど、活発な意見交換が行われました。

アンケート結果だけでは分からない「学生の切実な意見」を聴くことができ、参加した教職員からは「学生の前向きな姿勢が伺え、とても頼もしく感じた」「学生の意見が授業だけではなく、学生生活、サークルを含んでいたことに大変触発された」といった感想が寄せられています。当日学生代表の皆さんから寄せられた意見は、今後の授業方針等を検討する際の参考として活かされています。

本学では、これからも学生の視点を取り入れた教育改善の取り組みを行っていく予定です。興味のある方はFD委員会事務局(教務課)まで是非ご連絡ください。



深い学びにつなげる [スタディプラス]

Study+

Vol.08
2021.SPRING

教員インタビュー

授業の工夫・改善レポート



基礎科目群
基礎ゼミナール

学生が議論しやすい
オンラインツールを
選び、授業を活性化。

宮本 礼子 准教授
(健康福祉学部 作業療法学科)

授業の開始当初からオンラインが中心となった2020年。宮本先生の「基礎ゼミナール」では、チームコミュニケーションツールを活用することで、新1年生の授業の活性化を図りました。

「基礎ゼミナール」はどのような授業で、
どのようなことを目標にしていますか？

「基礎ゼミナール」は新1年生が入学後に履修する必修科目です。授業は25名程度の少人数クラスで行われ、数名のグループで調査、議論、発表といった一連の流れを体験します。自分たちでアンケートを作成し、所属する学科の学生に答えてもらうといったことにも取り組みました。これらを通して大学での学び方を身につけることも、この授業の大切な役割です。また学部を超えてクラスが構成されるので、自分とは異なる考えや知識と触れ合う、良い機会にもなっていると思います。本年度、私が担当したクラスでは社会の多様性などについて考えてもらうため、スティグマ(偏見からくる社会的差別・不利益)をテーマに設定しました。法学部の学生が法律の中のスティグマを取り上げるなど、グループごとにさまざまな視点でスティグマを捉えていましたが、こうした価値観の違いを学生たちも受け入れ、尊重していたと思います。

スティグマを持つ人



授業ではどのようなことに取り組み、
どのような改善を行っていますか？

2020年度は前期からオンライン授業が中心となり、1年生は学科への所属意識を持ちにくい、難しい状況だったと思います。そこで授業の初期にはテーマに沿った書籍の感想を提出してもらい、その発表からそれぞれの学生の価値観や視点を共有できるように心がけました。またオンライン上では質問しづらい空気を感じたので、Slackの運用も開始しました。会ったことのない学生同士でLINEの連絡先を交換するのは抵抗感があると思い、大学のアドレスで紐付けられているSlackを選んだのですが、グループごとのチャンネルも設定でき、私もそれぞれの進捗状況を把握できるので、授業を進める上で大いに役立ちました。また授業時間外にZoomを立ち上げて議論の続きを行うなど、学生たちもさまざまなオンラインツールを活用していたと思います。時にはインターネット接続が不安定な学生もいましたが、Slackですぐに報告してくれたため迅速に対応できました。

この授業で今後取り上げたいこと、また授業を履修する学生に
伝えたいメッセージはありますか？

「基礎ゼミナール」では、授業を担当する教員がさまざまなテーマで授業を展開しています。また「大学での学び方を身につけること」が目的でもあるので、学生一人ひとりが興味に合わせてテーマを設定して掘り下げるといいのではないかと思います。今回Slackを使って学生とやり取りを行ったことで、メールの時よりも細かく具体的な質問が寄せられるようになるなどデジタルの効果を実感しました。今後は積極的にこうしたツールを取り入れたいですね。今後はさらに一歩踏み込んで、動画教材やオンタイムでのニュースを教材にしたディスカッションなどにも取り組めたらと考えています。

あなたの声で 授業が変わる!



TOKYO METROPOLITAN UNIVERSITY
東京都立大学

2020年度版

授業改善アンケート結果

実施期間 後期2021年1月12日～2月5日

※前期授業改善アンケートは実施していません。
※後期授業改善アンケートはWEBにて実施しました。

アンケート結果の詳細はFD委員会ホームページに掲載しています。
<https://www.comp.tmu.ac.jp/FD/>

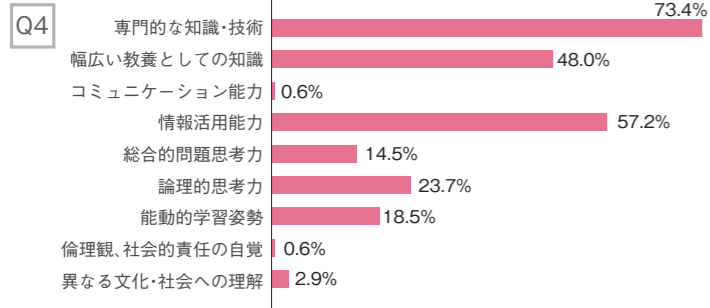
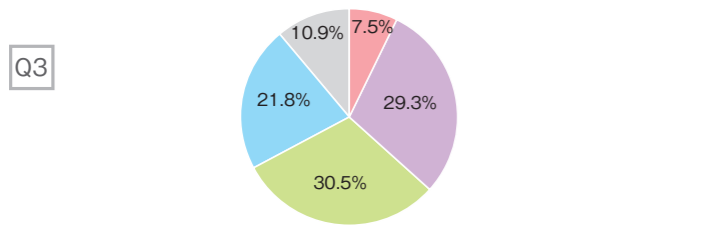
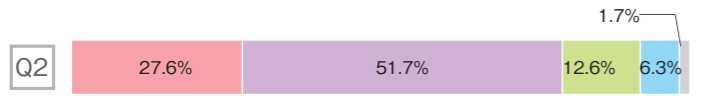
【共通アンケート項目】

- Q1 この授業のシラバスは、授業を選択し、学習するうえで役立つ内容だった。
- Q2 授業全体を振り返って、あなたはこの授業を理解できた。

情報リテラシー実践科目

後期▶ 履修登録者数 495人:回収数 174人 回収率 35.2%
授業数 22クラス:実施数 18クラス 実施率 81.8%
※「情報リテラシー実践Ⅱ」で実施

【共通アンケート項目 後期 DATA】



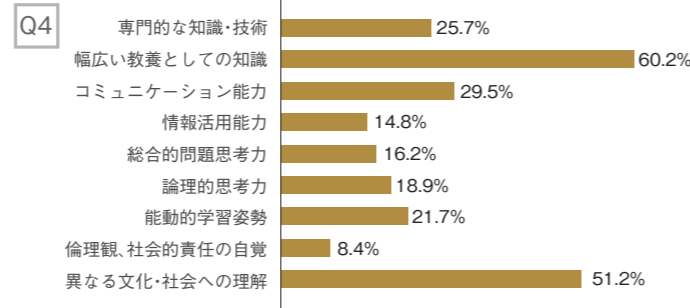
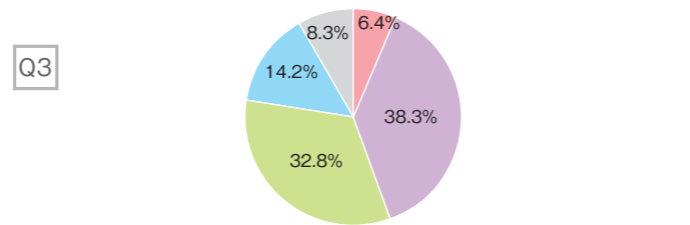
- Q3 授業時間以外で一週間に平均どのくらい、この授業に関連した学習をしましたか？
(予習、復習、課題、試験勉強、この授業の理解をさらに深めるための自主学習を含む。)

この授業で修得・向上できた能力を選択してください(複数回答可)。

実践英語科目

後期▶ 履修登録者数 1,534人:回収数 653人 回収率 42.6%
授業数 76クラス:実施数 69クラス 実施率 90.8%
※「実践英語Ⅱb」で実施

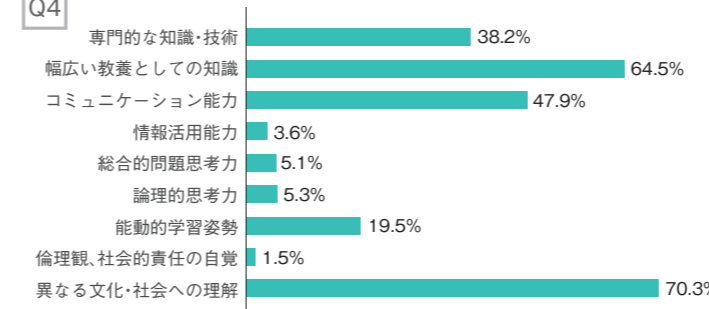
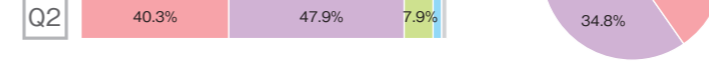
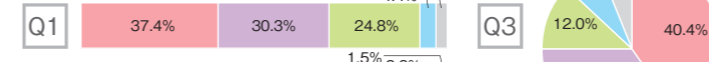
【共通アンケート項目 後期 DATA】



未修言語科目

後期▶ 履修登録者数 2,307人:回収数 869人 回収率 37.7%
授業数 106クラス:実施数 85クラス 実施率 80.2%
※「ドイツ語Ⅰ」「フランス語Ⅰ」「中国語Ⅰ」「朝鮮語Ⅰ」で実施

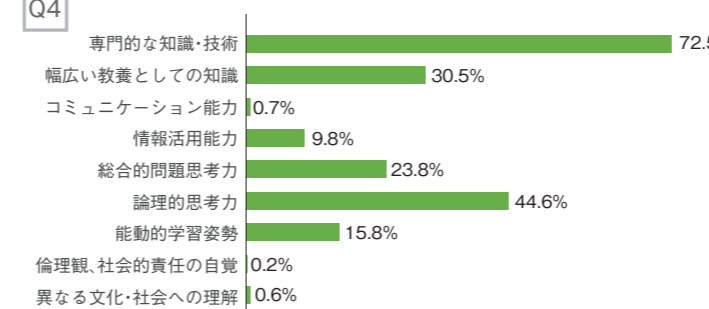
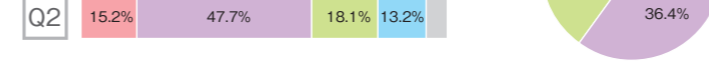
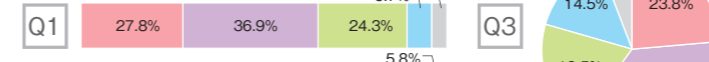
【共通アンケート項目 後期 DATA】



理系共通基礎科目

後期▶ 履修登録者数 3,430人:回収数 1,060人 回収率 30.9%
授業数 51クラス:実施数 46クラス 実施率 90.2%

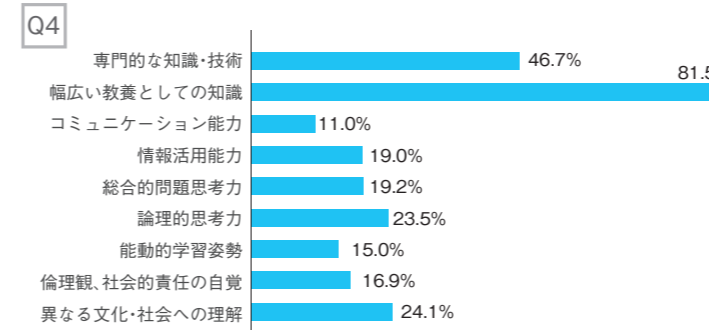
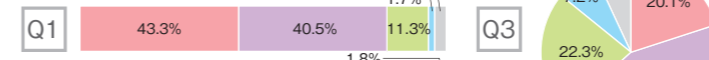
【共通アンケート項目 後期 DATA】



教養科目群・キャリア教育科目

後期▶ 履修登録者数 4,258人:回収数 1,692人 回収率 39.7%
授業数 42クラス:実施数 36クラス 実施率 85.7%

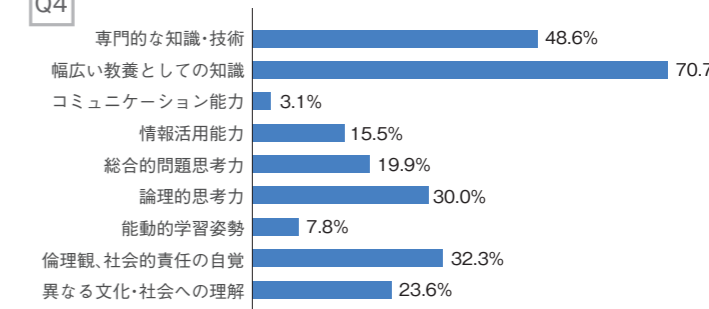
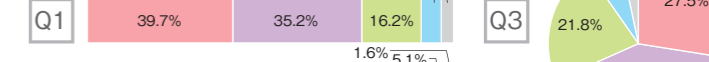
【共通アンケート項目 後期 DATA】



基盤科目群

後期▶ 履修登録者数 3,683人:回収数 1,415人 回収率 38.4%
授業数 24クラス:実施数 22クラス 実施率 91.7%

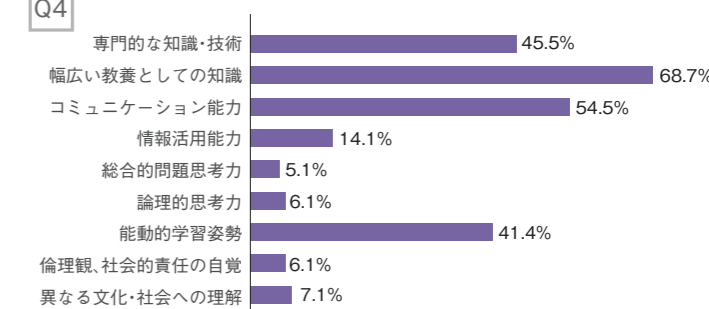
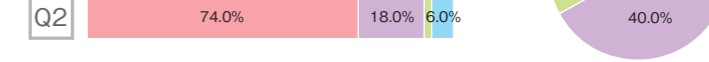
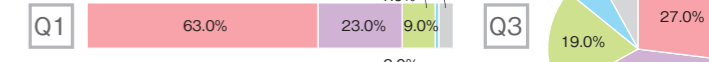
【共通アンケート項目 後期 DATA】



保健体育科目

後期▶ 履修登録者数 215人:回収数 100人 回収率 46.5%
授業数 21クラス:実施数 19クラス 実施率 90.5%

【共通アンケート項目 後期 DATA】



主な意見と改善の取組み

学生 こんな意見・感想がありました
(2020年度前期学生を対象としたオンライン授業アンケートから)

- 課題を出した後、フィードバックをして欲しいです。
- 多くの授業で課題等が出されるため、提出期限を普段より長めに設定して欲しいです。
- 学生同士の意見交換ができず、お互いの理解を高め合うことが難しい。もっと学生同士が直接交流できる場を設けて欲しいです。

教員 こんな改善・対応を行いました
(2020年度後期の改善)

- 授業後に実施するミニレポートについて、毎回フィードバックを行いました。良いレポートの着眼点等をフィードバックすることで、学生の理解も深まり、次回以降のレポートが良くなりました。
- 時間的な余裕を持てるよう、レポートの提出期限を例年より長めに設定するようにしました。
- 学生同士の交流機会を提供するため、毎授業でZoomのブレイクアウトルームを用いたグループワークを設けました。「自分と異なる視点・意見が刺激となった」と学生から好評でした。

巻頭言 FD委員から学生の皆さんへ

2020年度FD委員 法学部 大杉 寛 教授

本稿が皆さんの目に触れる頃には事態が収束に向かっていくことを願うばかりですが、昨年来のコロナ禍が社会にもたらした影響は計り知れません。健康被害はもちろんのこと、精神的・経済的な打撃にまで及びました。大学にとっても同様です。普段ならば当たり前のキャンパス・ライフが著しく損なわれました。それでも、カリキュラムに即して科目配置され、授業時間が編成されたなかから選択し、授業に臨み、一定の成績を収め、所要の単位を取得し、卒業資格を得るという、当たり前の学びのプロセスが当たり前には確保されなければなりません。

他方で、試行錯誤ではじめられたオンライン授業は、大学での学びのニュー・ノーマル(新しい日常)としてもはや手放せないほどになりました。新たな可能性の発見といってよいでしょう。

いずれにせよ、学びの機会や場をしっかりと確保し続けることの大切さが改めて切実に感じられたことでしょう。大学の使命として、履修状況、成績分布、単位取得状況、卒業率などの指標を吟味し、コロナ前に比べてなにか変化がなかったか、細心の注意を払うのは当然です。しかしながら、それだけでいいわけではありませ

ん。なぜなら、これらはアウトプット=結果を示すものにしすぎないからです。コロナ禍を理由に、本来獲得が期待されたはずの学修成果が損なわれている意味がありません。何よりも、学びがもたらすアウトカム=成果こそが大切だからです。学修成果は学生のみなさんにとっては学びを通じた成長の証です。さらには社会生活での糧となるものでしょう。より長い目で見た、大学の学びが持つ社会的インパクトを示すものでもあります。だからこそ、学修成果の可視化の取組みが求められているのです。将来、矜持を持って社会で活躍していくうえでも、学生のみなさんには自ら修めたはずの学修成果をしっかりとかみしめてほしいと考えています。

授業改善アンケートの詳細やFDのトピックスは
東京都立大学FDウェブサイトでも紹介！

アンケート集計グラフのほか、「Study+」のバックナンバーやセミナーの報告など、さまざまな情報を掲載しています。

<https://www.comp.tmu.ac.jp/FD/>

スマホはこちらから